

N. A. Jayawickrama (ed. & tr.):

The Chronicle of the Thūpa and  
the Thūpavaṃsa.

校 部 建

これは Vacissara 長老原著 Thūpavaṃsa の英訳と校訂テキストとを内容とする。ユネスコの援助を受けて刊行されている南アジア・東南アジア諸国の古典の翻訳シリーズの一冊に加えられたものである。

Thūpavaṃsa は比較的後代の書で、いままであまりわが国で知られていないが、パリー文学史やセイロン古代史の学徒にとっては興味深い典籍の一つである。著者 Jayawickrama はセイロン大学の史学科の学生らのために二十年以上もこの種のパリー史書を読んで来た学者で、この校訂・翻訳の仕事もそれら学生の懇願によるところがあるという。

このテキストのローマ字による刊本はすでに一九三五年 B. C. Law によって P.T.S から出されたが、久しく絶版となっている。今回の版は、既出の諸刊本のほかに、新たにセイロン南部の各所から得られた十種の写本をも用いて校合したものである。それら写本の年代は十六世紀初頭から十九世紀初めにかけての

間で、西欧よりの侵略勢力に対応を余儀なくされて伝統的学芸が概ね退潮した時代に当り、書写のできばえは必ずしも良好なものとは言いがたい、という。著者は校訂に当たってずいぶん慎重な態度をとり、シンハリス語で書かれこの書と深い関連のある Sīnhara-thūpavaṃsa やこの書の本資料となっている諸書(ジャータカ、ブッダヴァンサ、マハーヴァンサ、種々のアッタカタールなど)をも参照し、脚註として付けられた注の提示はかなり詳細である。Law ed. を披見し得ないので比較できないが、よほどそれを改善しているのではなからうかと思われる。この書に先立って、同じく Thūpavaṃsa と名づけられた書が二つあった、とこの書の序偈は語っている。一つはパリー語の、もう一つはシンハリス語のテキストであった、という。シンハリス語のそれは「大塔」礼拝の際読誦されたと十二世紀初頭の一金石文が語っているものに当るらしい。これら先行の二書はこんにち共に失われているが、訳者 Jayawickrama によればそれらは、恐らく Cetiyavaṃsatīhakatā と呼ばれたテキストと同内容であるらしい。現在の Thūpavaṃsa はその *rewriting* ともいうべきものであるが、しかし単なる改訂や補筆なのではなく、先行の本(およびそれ以外のパリー諸文献)から資料を得ての新しい書き下ろしであると見られる。Sīnhala-thūpavaṃsa は Thūpavaṃsa に先立ち後者は前者に基づいて書かれたものとする説と、Thūpavaṃsa の方が成立は古く Sīnhala-thūpavaṃsa はのちにそれを一つの手引きとしてさらに他からも資料を得て書かれたものとする説とがあるが、著者はガイガー、

グーダクンバラらに与して後説に賛意を表している。

Thūpavansa の作者 Vacissara 長老が、かの僧伽爾正を図つたことで有名な英主バラークラマバーフ (Parākramabāhu II Prākramabāhu) 一世 (一一五三—一八六年在位) の治下に在世した人でサーリプッタ長老の同時代の先輩であつたとすれば、その年代に多くの問題はない。しかし、セイロン佛教史上 Vacissara の名で知られる学僧は何人が存在した。上記のサーリプッタ長老に六人の著名な弟子があつてその一人も Vacissara の名をもつて呼ばれていたし、ガンダヴァンサなどの記述が Vacissara なる長老の作に帰している書物はあまりにも多いところからすれば、なお他にも同名の別人があつたと考えられる。Jayawickrama は Thūpavansa のコロフォンの記載の検討から出発して、種々な推論を試み、Thūpavansa の作者 Vacissara 長老は右に挙げた二人の Vacissara のいずれとも異るとし、おそらくバラークラマバーフ二世 (一二三六—一七一年在位) 治下に在世した人であろうと結論している。彼が Saccasankhapa に対してシンハリズ語の釈論を書いた人であることは Thūpavansa のコロフォンにいうところである。

Thūpavansa の内容は、その標題が示すように、佛塔の歴史である。叙述は、久遠のいにしえ青年スメダがデーバンカラ佛の下で菩提心を起こした物語に始まり、デーバンカラ佛からカッサバ佛に至る過去の諸佛のために建てられた佛塔のこと、菩薩の釈迦族の王子としての誕生と出家のことおよび出家に際して捨離された宝冠と着衣のために須弥山上に Cūḷamani-

cetiya が梵天界に Dusacetiya が建てられたこと、成道・入滅のことおよび八分された佛舍利と灰と舍利を計量した量器のための十の塔が建てられたこと、それらの中一つを除いた九塔から舍利を集めてアジャータサットゥ王によって一大塔が造られること、その塔から佛舍利を得てアソーカ帝が八万四千の僧院と cetiya とを建てること、マヒンダ長老とサンガミッターニのセイロンへの来教とサンガミッターによってもたらされた菩提樹のこと、デーヴァ・ナンピヤティッサ王 (前二五〇—二一〇年在位) によってその領土内一ヨージヤナごとに一基の塔が建てられること、などを語って、ドウッタガーマニー王 (前一〇一—一七年在位) による「大塔」の建立の経緯の詳説に至る。

しかし、一面からすれば、この書は、特にその後半は、佛教史書の衣裳をまとった一つの英雄物語であるとも言える。全篇十六章の中、第九章以下の叙述はすべてドウッタガーマニー王を中心人物として展開する。彼はドウッタ (duttā = wickē) という呼称を冠せられて恐れられたほど勇猛果敢な軍人であり、抜け目のない戦略家であるが、征戦果てて戦禍の悲惨に心を苦しめ、ただおのれが正法のために尽くす活動にわずかに心の慰藉を見出すのである。国民的英雄は信心の闘士となる。「悪ガーマニー」は敬虔な優婆塞として、未来世に弥勒佛の下で出家してすぐれた佛弟子となることが予期されることになる。そこにわれわれは民衆の英雄讃頌の感情と宗教的な心情との結合の興味深い一例を見出すことができる。

(PTS, London, 1971, xxiv + 286 p. f. 630)